直言

常勤医師数を増やすことが根本的な課題 現職員が高い志と能力をもつことが前提

医療の質向上で新病院投資に見合う成果を

神戸徳洲会病院 院長 新保 雅也

当院は神戸市内にあるとはいえ明石市に近く、淡路島とつなぐ明石海峡大橋が自然景観の一部のように見え、シンボルとなっています。当院がある垂水区は道が細く曲がりくねり、びっくりするほど急勾配の坂が多いのですが、少し上ると瀬戸内海と淡路島が見える面白い場所です。当院は今年で築37年、建物はかなり老朽化が目立っています。今後、神戸市より借り受ける駅側の土地に、約2年後、新築移転の予定で、目下、基本設計の真っ最中です。市からは産科と小児科の充実を強く要請されており、現在の産科医師2人（出産は昨年度33件）、小児科医師3人の常勤体制からさらに拡充を図ります。新病院は309床でオープン、年間4,000台以上の救急車受け入れ（2022年度は約3,600台）、心臓外科再開を含めICU10床、HCU20床の急性期体制を整えます。放射線治療を含めたがん治療の充実や口腔外科の新規開設、療養病棟も引き続き運営し、幅広い地域医療ニーズに応えられるようにします。現時点では、昨年、脳外科、整形外科の常勤医師入職により、これら科の手術も可能となり、本年1月からは循環器内科の常勤医師入職にともない心臓カテーテル検査・治療、下肢血管の処置、不整脈に対するアブレーション（焼灼）治療なども積極的に行っています。

地域連携会議をWEB開催 紹介患者の増加に力尽くす

3月18日に地域連携会議をWEBで行い、約20施設に当院の現状を伝えました。今後も診療所への訪問など近隣医師会への働きかけを続け、当院の診療内容を周知し患者さんを紹介していただけるよう尽力します。7月には今年半期分の診療実績をまとめて資料として配布、9月には対面での地域連携会議を予定しています。

当院には院内救急救命士が10人以上おり、救急受け入れ時には中心的な役割を担っています。診療所や施設からの依頼により、救急車で迎えに行くプレホス対応も行っています。昨年度は73件の依頼搬送がありました。救急の断りは新型コロナによる院内クラスター（感染者集団）発生などにより、昨年度は約3割に達しましたが、今年4月単月では受け入れ率94%です。

根本的な課題としては、現状20人と少ない常勤医師数を増やすことが挙げられます。4月に名古屋徳洲会総合病院から亀谷良介院長に院長代行として異動していただき、諸制度を勘案したうえで初期研修医や専攻医の研修連携施設への登録のため、大学病院や他病院に精力的にコンタクトを取り、人材確保に動いています。もちろん私も亀谷・院長代行も単に外部から人を集めればいいのでなく、現職員が高い志と能力をもつことが前提との認識で一致しています。将来的には十分な教育を提供でき、多くの医師が勤務を希望する魅力ある病院を目指します。

高砂西部病院と連携・協力 共に発展していくこと理想

近隣の競合病院とは良い意味で医療レベルを争い、高め合うことが結果的に地域医療の底上げにもつながると思います（最後は勝ちたいのが本音です）。個人的には医師となって34年となり集大成となるはずですが、臨床現場では情けない思いをすることも多々あり、若手の外科手術のサポートや救急の初療診療に注力するなど、つねに新たなことを学び続けていきます。

私が10年間勤務した前任地の高砂西部病院へは1時間以内に行ける距離で、同院の牧本伸一郎院長は私のかつての外科師匠でもあります。できるだけ連携・協力し、名古屋病院と大垣徳洲会病院のように共に発展していくことを理想としています。

新型コロナも5類となり、これから本当の医療の勝負が始まります。「医師の働き方改革」も来年から施行され、昭和的な奮闘が終焉を迎えます。間延びした勤務（私もそれに浸っていたかと思います）から労働時間は短くなるものの、目標設定をより鮮明にし、PDCA（計画・実行・評価・改善）サイクルをより早く回すなど、戦略的なメリハリのある勤務で適応していかねばなりません。

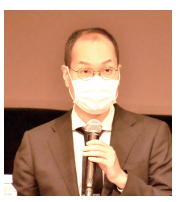
今年で創立50周年を迎えた当院の本体でもある徳洲会グループからは、多大な支援を受けています。新病院プロジェクトも当院単体では、とてもできない大規模投資です。ただ、お金で立派な箱はつくれても決して買うことのできない医療の質は当院独自に高め、最終的に投資に見合う成果を上げたいと思います。皆で頑張りましょう。

日本臨床栄養代謝学会

徳洲会が10演題発表

“臨床栄養の明日”見据え研鑽

第38回日本臨床栄養代謝学会学術集会が5月9日から2日間、兵庫県で開催された。徳洲会グループはシンポジウム1演題、一般演題9演題（口頭6演題、ポスター3演題）を発表した。



シンポジウムに登壇した淺見部長

シンポジウムでは、武蔵野徳洲会病院（東京都）の淺見貞晴・循環器内科部長が「北多摩北部二次医療圏における日本摂食嚥下リハビリテーション学会嚥下調整食分類（学会分類）普及の試み」と題し発表した。学会分類は、嚥下調整食の食事・とろみの程度に関する基準。普及のための資料（インフォグラフィック・クリアファイル）を作成し配布すると同時に、臨床の場での学会分類の使用状況や普及度を把握するため、医療者などにアンケート調査を実施。

合計233人から得た回答を分析した結果、学会分類の認知度はケアスタッフで約16%、医療者で約42%。クリアファイルを見た回答者の約9割が「学会分類を使いたい/興味をもった」と答えたことから、淺見部長は「クリアファイルの配布は学会分類の普及に役立つと考えられる」とまとめた。また、大会参加者に800枚のクリアファイルを配布、好評を博した。

一般演題は次のとおり。

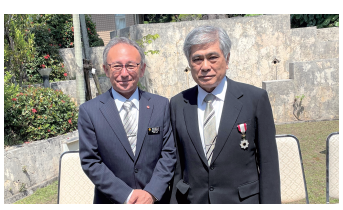
【口頭発表】▼神賀貴大・仙台徳洲会病院外科部長「Stage Ⅳ胃癌患者の予後予測因子としてのCONUT変法スコアの有用性の検討」▼村山敦・岸和田徳洲会病院（大阪府）歯科口腔外科副部長「Stevens-Johnson症候群の患者に生じたと考えられたRefeeding症候群の1例」▼山田桐絵・山内病院（神奈川県）管理栄養士「長期的に栄養管理を施行する入院患者の栄養状態と、栄養療法の方針の検討に関する調査」、「相互接続防止経腸栄養コネクタと従来コネクタの胃瘻カテーテルにおける半固形状栄養剤の通過速度の比較検証」▼永沼智至・吹田徳洲会病院（大阪府）薬剤部主任（薬剤師）「短腸症候群患者におけるテデュグルチド投与による有効性の検討」▼伊藤典子・湘南鎌倉総合病院（神奈川県）栄養管理センター主任（管理栄養士）「ICU患者の栄養管理のデジタル化に向けたシステム構築」

【ポスター発表】▼山根璃子・吹田病院薬剤師「GLIM基準を用いたNST介入患者に対する低栄養重症度判定の再評価」▼栗並美保・福岡徳洲会病院栄養管理室係長（管理栄養士）「重症患者に対するICU専任管理栄養士の今後の栄養介入への検討」▼加藤恭平・古河総合病院（茨城県）薬剤師（NST専門療法士）「当院のNST活動の現状と今後の課題」

嘉手苅・南部徳洲会病院部長

旭日双光章と赤ひげ功労賞

地域医療への貢献でW受章・賞



叙勲の伝達式で、玉城知事と嘉手苅部長（右）

南部徳洲会病院（沖縄県）の嘉手苅勤・脳神経外科部長は春の叙勲で旭日双光章と、「第11回日本医師会 赤ひげ大賞」で赤ひげ功労賞を受賞した。

那覇市内の知事公舎で5月9日、叙勲の伝達式が催され、玉城デニー知事から勲章と勲記を受け取った。一方、赤ひげ功労賞は日本医師会と産経新聞社が主催し、厚生労働省などが後援する賞で、「病を診るだけではなく、地域に根付き、（中略）住民の疾病予防や健康の保持増進に努めている医師」に贈られる。徳洲会で初の受賞だ。

嘉手苅部長は「大変光栄です」と第一声。1982年5月に同院に入職後、41年にわたり、脳神経外科医として一貫して沖縄県南部の救急医療をはじめとする地域医療に貢献してきた。「患者さんの話をよく聴き、丁寧な病歴聴取や身体診察を心がけています」と話す。

医師会活動にも積極的で、89年から2022年まで33年間、南部地区医師会の理事を務めた。理事在任中の2000年に介護保険制度がスタート、同医師会立介護老人保健施設の開設などに尽力した。

沖縄県病院対抗テニス大会

2クラスで優勝

優勝したテニスサークルのメンバー

南部徳洲会病院のテニスサークルは第68回沖縄県病院対抗テニス大会（3月21日、那覇市）に出場、B、Cクラスで優勝した。同大会は、県内の医療機関に勤務する職員らが参加し、年2回開催。A～Cのレベル別でチーム総当たり戦を行う。1チーム3組のダブルスで構成、1試合につき2勝したチームが勝利。

同サークルには同院の多職種をはじめ、新都心クリニック、ひめゆりクリニックのスタッフが所属。キャプテンの新里ゆかり看護副主任（南部徳洲会病院）は「5年ぶりの優勝でした」と声を弾ませる。Bクラスに出場した同院の久志安範・特任院長は「練習時からコミュニケーションを積極的に図り、息の合ったプレーが勝利を導きました」と振り返る。「次の大会でも優勝を目指したい」と新里・看護副主任は力を込める。